●と　き：平成２３年５月２４日(火)雨後曇

●ところ：ボルネオ島到着後、キナバル公園へ

●報告者：藤津

◎コース：関西国際空港(9:50)→コタ・キナバル空港(1:53/2:40/チャーターバス)→キナバル公園入口(5:00)→ロッジ(5:30/5:45)→レストラン(6:00/8:00)

4時半起床。雨が降り続いている。5時半に娘の車で、松井山手まで乗る。6時10分の直通リムジンバスが出ている。山形さん、阪本さんがここで乗る。

1時間少々で関西国際空港に着く。わざわざ、大阪まで出ることを思ったら、便利になったものだ。8人全員揃い、2時間前の7時50分に搭乗手続きをする。ゲートを入って朝食とする。各自、出発ロビーで待つ。雨は止んできた。

定時の9時50分に離陸。マレーシア航空。席は後ろの方だった。後ろは空いていた。各自自由に席を移動する。もう、10時半には機内食。メニューが豊富だった。持ってきたパンフレットを読む。下を見るとフィリピンのような島影。しばらくすると、雲の上ににょきっとキナバル山がのぞいていた。2時前に着陸。日本との時差は1時間。1時間マイナスする。5時間の空の旅だった。科学的な頭を持っていないので、謎が解けなかったことがある。時計は電波時計である。確か、千葉と福岡で電波を受信して時間合わせをしている。帰るまで、ずっと日本の時刻のまま止まらずに動いていたことである。どうなっているんだろう。

アナウンスでは外は34度。日本の真夏と思えばいい。乗客も多くなく、入国手続きも簡単に終わった。両手の人差し指の指紋をとられた。入国審査官の女性が気さくに、「テリ・マカシ(ありがとうございます)と言ってくれ、マレー語の洗礼を受けた。3日間お世話になる現地の日本語ガイドの男性サキリンさんと合流。まず、空港ロビーで両替。日本の3分の1。全行程食事付きなのでお金を使うことはほとんどなかった。主に帰りの土産物だけに使った。

8人なのに大型バス。外の風景を眺める。町を抜け、高度を上げていく。前に大型車がいるとなかなか追い越せない。道々バナナの木。日本のトヨタ、イスズの車が走っている。放し飼いの犬、鶏が見える。車内はエアコンが効いて寒いくらい。集落が所々ある。湿気が多いのか高床式だ。曇っていてバスからはキナバル山は見えなかった。公園近くなるとガスが出てきた。5時に1563.8mの公園本部に着く。針葉樹林の中にあり涼しい。サキリンさんが、管理事務所で入山届、入山料などの支払いをしてくれる。ここは2000年12月、世界自然遺産に認定された。

公園の車で宿泊のロッジへ。男性は「ネペンティスロッジ」、女性は「ヒルロッジ」。荷物だけ置いて、同じ車で公園事務所近くにあるレストランへ、夕食に。6時から。ビュッフェ形式。好きなものをとって食べる。辛いスープがおいしかった。御飯は細長いぱさぱさの米。野菜が豊富。果物はモンキーバナナ。これがいける。パイナップルもある。客は東洋人ばかり。日本人はいなかった。コーヒーとミルクはスティックのネスカフェだった。お茶は地元のサバティのティバッグ。

終わって、宿まで送ってもらう。シャワーの湯が出ないのが、残念だった。部屋で明日の荷物を仕分ける。上の山小屋で使うものは一人5kgまでポーターに持ってもらえる。自分で持つのは、弁当、お茶、雨具、おやつくらい。ボストンバッグは次のホテルまで運んでもらえる。8時には寝る。

【キナバル公園本部】

●とき：平成２３年５月２５日(水)晴

●ところ：キナバル公園からラバン・ラタ・レストハウスまで

◎コース：キナバル公園から循環バスにて登山口(8:50/9:00)→カンディスシェルター(以後避難所)(10:00)→ウバー避難所(10:30)→ロウィル避難所(11:20)→メンペニング避難所辺りで昼食(12:20/12:50)→ラヤン・ラヤン職員宿舎→(1:

35)→最後のビローサ避難所(2:50)→パカ・ケイブ避難所→ラバン・ラタ・レストハウス(4:30)

起きたのが4時。明るくなりだして外に出る。目の前にががたるキナバル山がそびえ立っていた。ロッジの入口の外灯に蛾が群れていた。昨夜は猿のような鳴き声が一晩中していた。

歩いてすぐの所の女性のロッジに行ってみる。2人部屋にエクストラベッドを入れたのが、いけなかった。ベッドのクッションが悪く、おまけに湿っぽくほとんど眠れなかったらしい。男の宿は豪華で、階下に応接間があり、衛星放送が入る。山は隠れてしまった。帰り道、日本と同じ紫の朝顔とピンクの日照り草が咲いていた。帰ってコーヒーを淹れようとポットに電源を入れた、いつまでたっても湧かない。諦める。

荷物を3つに分ける。7時45分に車が迎えに来てくれるので、荷物をまとめて下の広場へ。ここで、山岳ガイドのビンガーさんとエリンさん、それにポーターのジョニーさんと合流。

20代1人、30代2人の3人の若者だ。彼らはほとんどがキナバル山の標高800m付近に住むカダザン・ドゥスン族の出身らしい。2台の車で公園管理事務所へ。昨夜と同じレストランで朝食。朝もビュッフェ方式だ。エコバッグに入った昼食を各自受け取る。その量が多いと、女性陣は半分ちかくガイドさんにプレゼントしていた。出発時間まで外で待つ。

世界遺産の標語があったので写した。

"Take Nothing But Photographs"

"Leave Nothing But Footprints"

8時30分に2台の車で1866mの登山ゲートへ。受付で登山許可証をもらい、首から下げる。これは下山するまで身につけておかなかればならない。ゲートが開くのをマレーシアの女学生達が待っていた。我々のような老人グループはいなかった。横に名前や国名を書いた大きなボードがあった。山岳マラソンの上位者である。ここから山頂往復2時間40分4秒とは驚異的だ。9時に窓口で名前を記入して、いよいよ出発。水、菓子などを売っている。

少し下るとカールソンの滝。あとはえんえんと樹林の中の登りが続く。先頭は日本語の分からないビンガーさん、次が私。一番後ろはサブガイドのエリンさん。真ん中に観光ガイドのサキリンさん。ポーターのジョニーさんは後ろの方。8人

に4人の現地の人が付いてくれた。ポーターは22kgのリュックを背負っている。

ガイドが花の名前を教えてくれる。ピンクのキナバルバルサム、日本と違うシャクナゲ。ちょうど1時間かかって第一避難所。屋根のある休憩所、それにトイレも、ごみ箱もある。天井には救急用の担架が置いてあった。

ボルネオのトイレ事情をお知らせしよう。トイレットペーパーは町のホテル以外はない。今回、持ち物の中に必ずトイレットペーパーを入れるようになっていた。水洗だが、紙は流さない、中のくず入れに入れる。地元の人は尻は左手でシャワーの水で洗う。シャワーのノズルが無いところは、水の入ったバケツが置いてある。従って、左手は不浄なものと考えられている。握手はもちろん、右手、子供の頭を撫でるときも、決して左手でやってはならない。

いろんな国の人に会う。「ハロー」と挨拶。キナバル山登山には必ず地元のガイドとポーターを付けなければならない規則になっている。他のグループのガイドやポーターは同じ村の出身者で、お互いに声を掛け合っている。これはいいシステムだと思う。地元の職の斡旋にもなるし、知らない高山を歩くのにガイドやポーターがいると安心だ。また、上の山小屋の食料他は人の背で運ぶ。頭より高いリュックや背負い子を持った人たちに抜かれた。女性もいた。みな、強い。

避難所と避難所の間がおおよそ1時間離れていて、休憩にちょうどいい。第2までは30分だった。休憩ごとに日本から持ってきたいろんなおやつが回ってくる。ガイドにも分ける。人間の食べ残しを目当てにボルネオカオナガリスがやってくる。菓子を手に持って手招きすると、手から直接食べる。人に馴れてかわいい。

ボルネオ島は熱帯地域で、乾期と雨期に大別される。今は、乾期である。蝉が鳴いている。真っ白のネックレスオーキッドがきれい。ランの種類が多いらしい。第三避難所でデンマークから来たという若い女性の二人連れがいた。

第四避難所で昼食。いろんな国の人たちで賑やかだ。下のレストランで作ってもらった同じランチボックスを開けている。中身はぱさぱさのサンドイッチ、ゆで卵二個、小さな林檎、それとモンキーバナナ。このあたりだったか、インドに2年間駐在しているという日本人の若夫婦と話をする。下山するまで日本人に会ったのはこの二人だけだった。

次の休憩場所は、避難所の横にスタッフ専用の小屋がある。ガイドやポーターの休憩場所になっている。中を覗こうとしたら、ダメだと言われた。日本でもお馴染みのペゴニアの黄色い花が咲いていた。木立ペゴニアというらしい。

最後の避難所を2時50分に通過。この頃には、足が上がらないほど疲れてきた。やっと、今夜の宿「ラバン・ラタ・レストハウス」(3272m)に着いた。2段ベッドが4つある部屋に案内される。下の食堂には早く着いた人たちでほぼ満員。そう言えば、追い越した人はいない、全員抜かれた。年を考えたら仕方ないことだろう。気にせず、ゆっくりと歩いた。高度順応のために必要なこと。

部屋で荷物の片づけ。それが終わって下の食堂へ。ここも、ビュッフェ方式。夕食は5時から7時半まで。なんと、3272メートルの山小屋でちゃんとした料理人がいるのには驚いた。野菜、スープ、鳥の唐揚げ、メニューは豊富。

【ラバン・ラタ・レストハウス】

●とき：平成23年5月26日(木)晴

●ところ：ラバン・ラタ・レストハウスからロウズピーク山頂まで

◎コース：2時起床→ラバン・ラタ・レストハウス(3:10)→サヤッサヤッ小屋(5:00)→ロウズピーク山頂(7:00)→ラバン・ラタ・レストハウス(9:30)

ここは2時起きと決まっている。4000mあるので、ゆっくりと歩いて、ゆっくりと帰るという趣旨らしい。我々より早く起きて、出発していくグループが多かった。山頂で御来光を拝むためである。2時にはもう食堂は開いている。好きなものを取って食べるが、まだ、胃がうけつけない。太田さんと家内が自信がないの

で、ここに残ることになった。2人の山岳ガイドに伴われ、途中まで外灯のある道を登って行く。世界でも、3千メートル超える山に外灯があるのは、他にないのではないか。ヘッドランプの明かりが頼り。リュックは軽い。上下の雨合羽とフリースのジャケット、それと水が入っているだけ。

最初は木の階段が続く。冷えているので、手袋をはめる。手摺りをもって体を押し上げる。ずっと先の方に先発した人たちの明かりが見える。木の階段が終わると岩の斜面をへつる場所に来た。ガイドがロープを持つように指示を出す。道しるべ代わりにずっと白い太いロープが張ってある。風が強いときはこれを持てば安全。

ぱっと景色が開けてきた。そこに最後の検問所の「サヤッサヤッ小屋」があり、名前をチェックされる。トイレもある。高山病らしき女の人がぐったりとしていた。ここから上は岩稜帯を歩くことになる。植物や動物のいない別世界だ。氷河が作った地形らしい。うっすらと明るくなった。

ガスが出てきて真っ白になった。小雨がぱらついてきた。雨合羽の上だけを着る。富士山より高い場所に来た。寒くて鼻水が垂れる。手袋をしても指の先が冷たい。下で見たロバの耳のピークが迫ってきた。下の小屋の電灯がちらちらと瞬いていた。夜が明けてきた。この天気では御来光は拝めなかったであろう。道は左をとる。昨日会った人たちが降りてくるのに会う。

ロウズピーク、4095.2mの山頂に着いた。狭い。4時間弱で着いたので平均だろう。心配していた高山病にも罹らなかった。写真を撮る人が次から次と来て長居はできない。ガイドに写真を撮ってもらう。この「ロウズピーク」は、この山に初登頂したイギリス人のヒュー・ロウ(1824-1905)から名付けられた。東南アジア最高峰に登ったという感慨はこの時は湧かなかったが、下山してからじんわりときた。名残惜しいが5分で下山にかかる。天気が良くなった。花崗岩で出来た岩は滑らないので助かる。ロープを持たずに歩く。こんな景色は日本にはない。下りは登りに較べれば楽だ。サヤッサヤッ小屋で下山のチェックを受ける。男の人が、疲れ果て、ロープを持って一歩一歩下山しているのを追い越す。下りで、他のグループも追い越した。一人を除いて60歳を超えた我々としては上出来だ。

朝方は暗くて見えなかった、一枚岩のへつりは思ったほど、怖くはなかった。危険なので他のグループも慎重にロープを持って下る。先には進めない。順番がくるのを待つ。

ここを過ぎると、木の階段になる。下りは手摺りを持つこともない。すいすい下る。山小屋も見えてきた最後の所で、登らなかった太田さんと家内が迎えに来てくれた。皆、いい顔をしている、という。他のグループは疲れきった顔をしていたと。下る途中、岩登りをしている2人が見えた。ほぼ、予定通りの時間で帰ってきた。ヘリポートの広場で全員写真を撮る。

レストランで観光ガイドのサキリンさんが迎えてくれた。お茶を飲みながら、話す。いい天気になった。

山頂からその日のうちにキナバル公園まで下るのが一般的。レストランには誰も居なかった。我々はそうしなかった。というのは、同じ道を下るより、花の多いと言われるマシラウルートを下るので、もう1泊この山小屋に泊まる。

昼食まで時間があるので、部屋に入って1時間ばかり休む。朝2時起きだったのでぐっすりと寝た。我々だけの昼食を作ってもらう。終わって、コーヒーを注文。テラスに持って出て、ひと時の会話を楽しむ。雲海が出てきた。豊かな気分だ。女性連中は外を散策している。木苺を摘んできてくれれた。酸っぱかった。4時頃になると、キナバル公園から登ってくる人たちで、レストランが混んできた。早いが、5時から夕食。終わって部屋に帰り、明日の下山の準備にかかる。

【ロウズピーク山頂にて】

●と　き：平成２３年５月２７日(金)晴

●ところ：ラバン・ラタ・レストハウスからマシラウルートで下山

◎コース：ラバン・ラタ・レストハウス(6:35)→パカ・ケイブ避難所(7:10)→ビローサ避難所(7:30)→分岐(8:05)→ロンポヨウ避難所(9:10/9:40/朝食)→ピカロッド避難所(10:30)→バンブ避難所(12:27)→マシラウリゾート(1:50/3:10/昼食)→サバホテル・サンダカン(8:30)

下山の日だ。時間があったら、第二次世界大戦中に日本人が掘り当てたという「ポーリン温泉」に入りたいと観光ガイドに頼んだ。下山時間次第と言う。我々の足では無理かな。昨夜は大荒れで、ガラスが割れる音がした。朝方も続いていた。登山が今日でなくて良かった。それでも、2時から登山準備をする音がしていた。この風では、岩の上で吹き飛ばされるだろう。

5時半に全員起床。朝食は途中で食べることに。同じようなボックスに入っていた。6時35分に出発。今日はサブリーダーだったエリンさんが先頭。私がその後ろを歩く。しばらく初日のコースを下る。まだ、風は収まっていない。マシラウルートの分岐に8時5分に着いた。ここで小休止。木苺が鈴なり。酸っぱくておいしいとは言えないが、摘んで食べる。下にはすばらしい雲海が広がっている。

ここから登りになる。大小のウツボカズラの群生が見られる。食虫植物の代表だ。大小ある。気持ちが悪い。上り下りが続く。下の集落の景色が見える。山では小鳥が囀っている。木には蜘蛛の巣のようなサルオガセがぶら下がっている。振り返ると、キナバル山の岩稜が眺められた。よくもあんな山を登ることができたものだ。下り切ったランポヨン避難所で朝食とする。ばさばさのチーズサンドイッチ4個、ゆで卵、モンキーバナナ2個、小さな林檎。すべて平らげた。

こちらのコースを登山するのは少ない。下る人も少ない。アメリカの若者が登ってきた。ずっと下りとなる。蝉が鳴いている。マレーシア人のような若者2人がガイドに伴われて登ってきた。ピンクのマネンネラが咲いている。ピカロッド避難所を10時半に通過。熱帯雨林の樹海の中に見事な滝が落ちているのが見える。あそこまでは誰も近寄れないだろう。台湾人の老若男女数十人が登ってきた。日本語が少し話せる人がいた。先頭と次のグループが離れている。この下りで会ったのは以上の人たちだけ。このコースは時間の余裕のある人しか利用しない。

下った所に橋が2個所あった。揺さぶって怖がらせる。写真を撮る。渓谷になった。これで、登りはないだろうと安心していたら、川を越えなければならない。

登ったり下ったりを繰り返す。

じめじめしたシーマ避難所で小休止。下にこれから下るマシラウ・ネイチャー・リゾートの建物が見える。まだまだ先だ。最後の登りが長く、きつかった。ローソクの木という大木があり、ガイドが、白い樹液を見つけた。ライターを付けると火がついた。4人とも休憩ごとに煙草を吸う。きつい仕事の息抜きだろうか。やっと、下りになる。もう終わりという所になって登山道を工事して、赤土が露出している。せっかく、これまで登山靴がきれいだったのに、ここでどろどろになる。赤土なので、底にくっつきなかなか取れない。

マシラウ・ネイチャー・リゾートに着いた。標高2000mの森の中にある別荘のような建物である。反対側の公園本部のように観光客も多くない。電気が点いていないのは節電のためか。明るい外のテーブルに陣取る。ここで、サキリンさん、ベリンガーさん、エリンさん、ジョニーさんと分かれる。日本から持ってきた土産とチップを一人づつに手渡す。反対に、キナバル山登頂認定書を一人づつもらう。いい記念になる。ここの昼食もおいしかった。他のグループもいた。

ポーリン温泉は無理となった。これからバスで、サンダカンまで走る。人の乗る車と、荷物車の2台で、マーケットまで。ここで、3日間お世話になった4人と別れる。8人にしてはもったいない初日のような大型バスに乗り換える。運転手が2人いる。日本語はサッパリ分からない。

途中から、アブラヤシの大規模プランテーションが続く。いくら走っても終わらない。熱帯雨林を切り開いて作ったもので、ヤシの中にまっすぐな道。果実から石鹸や食用植物油の生産に使われている。また、最近ではバイオディーゼル燃料としても利用。政府がゴムに代わる輸出品として力を入れている。熱帯雨林が伐採されて問題になっている。途中、その実を積んだ大型トラックが行き交った。日本のように道に送電線が張り巡らされている。一本道で信号がない。バスは100kmを越すスピードを出している。高速道路のよう。とっぷりと日は暮れ、ところどころ、明かりが点っている。集落があるのだろう。

サンダカンのサバホテルに着いたのは8時半になっていた。下山に時間がかかり、また、昼食に時間を取りすぎて、予定より1時間半も遅れての到着。立派な四つ星のリゾートホテルだった。チェックインをしているとき、生ジュースのサービスがあった。受付の女性は英語しか分からない。

夕食が9時半までらしい。時間がない。部屋に荷物を運んでもらい、下のレス

トランで夕食。ボーイも英語しか話さない。日本で言うところのバイキング方式。一般的にはビュッフェという。好きな海鮮を選び鉄板で焼いてもらったのがおいしかった。ビールを飲む。終わって3日ぶりの風呂。広いバスだった。下山して、長いバスの旅に疲れ、早めに休む。

【サバホテル・サンダカンの前で】

●と　き：平成23年5月28日(土)晴

●ところ：サンダカンからスカウリゾートへ

◎コース：サンダカン(8:10/車2台)→セピロック(8:54/10:45/オランウータン見学)→スカウリゾート(1:15)

プールがある。朝から女性が一人悠々と泳いでいた。7時から朝食。オムレツを焼いてくれる。果物もある。できたら、こんなところで一日ゆっくりとしたかった。8時には本日の宿泊のスカウ村から男性のガイド・アッサラさんと21歳の女性のミミイちゃんがエスコート。残念ながら、2人とも日本語が話せない。2台の車で出発。まず、セピロックのオランウータンリハビリテーションセンターへ。まず最初に、英語のビデオを20分ばかり見る。小ホールがほぼ満員。いろんな国の人がいる。ジャングルの中に入る。カメラ1台に付きお金を取られる。また、自然の猿がいるので持っている物を奪われる可能性があり、荷物は何も持てない。

囲いのところで、最初は猿の仕種を見る。10時と3時の2回、飼育係りが持ってくるバナナや牛乳にオランウータンがやってくる。それをじっと待つ。蒸し暑い。張ってあるロープを伝って3匹が現れた。1匹は子持ちだ。ビデオにもあったように、ペットとして飼われたり、森が失われて行き場のなくなったオランウータンが訓練されている。一人立ち出来るようになると、広大な森に返される。猿と違って、動作がのんびりとしている。飼育係りから餌をもらっている。オランウータンはマレー語で「森の人」という意味。人間と対等のようだ。ここボルネオ島とスマトラ島だけに生息する。

これが終わって帰ろうとしたら、子供の叫びが聞こえてきた。アッサラさんが飛んでいった。帰り道に猿の集団がいて、女の子供にちょかいを出したらしい。公園の人が追い払うまで待つ。

郊外は延々とアブラヤシの森が続く。まっすぐな道の先に季語でいう「逃げ水(蜃気楼)」が見られた。また、その斜面を日本の葛の葉が覆っている。先日、テレビでアメリカでもこれがはびこって問題になっていることを報じていた。日本だって、外来種の淡水魚や植物で困っている。町を抜けると信号もない。ときどき、英語でやりとりをする。途中、マーケットに寄ってもらう。レイシのような中身のスネークフルーツと小さいがおいしいモンキーバナナを買う。

3時間走って、スカウリゾートに着いた。森の中にロッジが点在している。なんと、クーラーはパナソニック製、室内の作りが行き届いていると思ったら、日本と現地の合弁で経営しているらしい。屋上から茶色に濁った川が見渡せた。

荷物を運んで、少し休んだあと昼食。我々8人だけ。ここもビュッフェ方式。終わって植林に出かける。ジャングルが切り開かれているので、旅行者に木を植えてもらう企画だ。キナバタンガン川の側の空き地に植林の準備がされていた。聞くところによると、ここに来るのは90%が日本人らしい。木の種類を聞いたが分からなかった。もし、また訪れることがあれば、ここまで足をのばし、立派な森に成長したのを見たいものだ。

その足で、リバークルーズに出かける。救命胴衣を付け、小さな船に8人乗る。ヤマハの船外機だった。伐採による土の流出のためか、水が黄色く濁っている。本流から支流に入る。普通の猿、天狗猿はボルネオ島の固有種、サギ。水面はホテイアオイの紫の花で覆われている。驚いたのは木の上にどくろを巻いている黒い縞模様の毒蛇だった。船が近づくので、飛び降りてこないか心配だった。

小雨が降ってきたので、傘を差す。他の観光客と会う。日本人の研究者が猿の生態を調べていた。2時間ゆったりと船の旅。

7時から夕食。夕方になり、蚊が出てきた。食堂の隅に古い楽器が置いてあった。食事が終わって、アッサラさんが、これから歓迎会をすると言う。老若男女村人が集まってきていて、なんと、その楽器で演奏が始まったのである。司会は英語。エレキギター、ドラム、歌もある。中国のカンフー(彼らは「カラテ」と言うが)を音楽に載せて演舞する。それが終わると、地元の踊りが始まった。みんな一緒に踊ろうと手招きをする。出ていって、地元の人と踊りまくる。くたくたに疲れた。

終わってしばらくして、オプションでナイトクルーズに出かける。夜のジャングルの探検だ。コースは昼間と同じ。サーチライトを照らす人と、小舟を操る2人。いたいた、小枝に眠っているルリカワセミ。かわいかった。何匹も見た。それにしてもこんな小さな生き物をどうして彼らは見つけるのだろう。猿も木の上で眠っているのを照らす。ワニがいるというが、我々には見えなかった。カメレオンも見た。2時間以上かけてジャングルの夜を堪能した。帰ったら、11時だった。すぐベッドで休む。

【リバークルーズ】

●と　き：平成２３年5月２９日(日)曇～３０日(月)

●ところ：スカウリゾートから帰国の途に

◎コース：スカウリゾート(10:00)→サンダカン空港近くの中華屋(11:55/12:15/昼食)→サンダカン空港(12:30/2:00/国内線)→コタ・キナバル空港(2:45/5:30)→クアラルンプール国際空港(8:10/11:45)

いよいよ最後の日になった。5時に起きて、6時から2時間モーニングクルーズに出かける。今回は本流を溯る。川の平地に集落が見える。期待していた象の群も、ワニも見ることは出来なかった。猿ばかり。狭いクリークを抜けると、大きな池水池が広がっていた。こちらもホテイアオイが群れ咲いていた。

8時に帰ってから朝食。なんと、お別れに女の子が日本の歌を歌ってくれた。ホスピタリティ溢れる人たちだった。

ロッジを10時に出る。一人づつ握手で分かれる。サービスでスカウ村を案内してやると言う。集落の真ん中に立派な小学校。新しい観光案内所が出来かかっていた。彼らが学んだという古い小学校も残っている。学校の側が墓地というのも驚いた。入れなかったがモスクもあった。

陸路でサンダカン空港に向かう。途中、大衆食堂に入る。中華屋だ。日本に嫁いだ日本語の出来るおばさんが働いていた。ラーメンを注文。女の人は焼きそばを頼んだのに、ビーフンが出てきた。別注でバナナの揚げたのも食べた。

サンダカン空港で、アッサラさんとも分かれる。帰りは関空までの直行便はない。コタ・キナバル空港まで出て乗り換え、クアラルンプール空港まで出なければならない。乗り換え時間に土産物を買う。クアラルンプール国際空港は宇宙ステーションのように立派だった。24時間営業のようだ。午前0時前に日本に向けて離陸した。

翌朝7時15分に関空に無事帰り着いた。出かけるときもそうだったが、また雨だった。例年より、1週間も早く、5月26日に梅雨に入ったらしい。

◆マレーシア関係の本

1)『マレーシア ブルネイ』ダイヤモンド・ビッグ社(地球の歩き方)

2)『ボルネオネイチャーアイランド』ダイヤモンド・ビッグ社(地球の歩き方GEM STONE)

3)『ディスカバリング サバ』Kota Kinabalu, Natural History Pub.,2001

4)ジスコ・ボルネオ旅行社のパンフレット